小児期逆境体験（ACEs）の影響を緩和する関わりのユニバーサルな提供体制の構築
―学卒後の若者に対するユースワークに注目して―

大阪公立大学大学院　現代システム科学研究科　博士後期課程　現代システム科学専攻　社会福祉学分野
学籍番号 DAA24003　長岡 若葉

研究背景

○児童期に虐待等の不適切な養育環境におかれた若者の状況

・心身への長期的な影響
例）脳梁の体積低下（De Bellis,Keshavan 2003）、
慢性疼痛（Sachs,et.al 2007）、犯罪罪率の上昇（McCord J. 1983）など

⇒「児童虐待」としての研究だけでなく、ACEs研究でも同様の指摘がなされている

ACE s（Adverse Childhood Experiences：小児期逆境体験）とは
児童虐待と家族の機能不全からなる尺度で、
0～18歳までの子ども時代に経験するトラウマとなりうる 出来事を指す（三谷 2023）
→Felitti VJ,et.al.（1998）の研究が端緒

・児童期に適切な支援に繋がることの難しさ
例）虐待者は虐待が重度であるほど「虐待を認めない」者が多くなる（森田　2019）
児童虐待被害を受けた者の虐待の認識時期が**20 歳以上**である割合が**50.5%**（一般社団法人Onara 2023）

○ACEsの悪影響を緩和する要因（＝保護的要因）

・「居場所」や「対話」等が有用
例）PACEs（メンター、親友、グループ活動の一員）
PCEs（親以外に少なくとも２人支えてくれる大人がいる、友達、学校に居場所がある）　など

＜課題＞
・児童期の関わりを重視している
例）PACE（Protective and Compensatory Experiences：Hays-Grudo ＆ Morris, 2022）
→成人期でのPCACEsの効果を実証するための臨床試験はほとんど行われていない（同）
例）レジリエンス（Resilience）
→子どもに対する教育的な介入プログラムがある一方で、成人のレジリエンスに対する介入はあまり体系化されていない（平野　2015）
・若者のサポート源として「家族」が当然視される日本社会
例）「親依存を当然視する社会意識の存在」（山田2013:18）
（日本の若者支援政策は）「『生活を支えてくれる家族が健在である（それゆえ家族が支えてくれる）という想定』」（岡部 2019：76）

○ユースワークとは

「**ノンフォーマルおよびインフォーマルな学び**を通じて、**若者の人格的・社会的発達を支援する**ことを目的とした、**若者が自発的に参加する活動**に関する**アクション**」（EU　2012）

→ユースワーカーとの**協働**を通じて若者の**主体的な**（voluntary）**参加**を促す**社会実践**

○ACEsと関係すると考えられるユースワークの効果

・青年期（12～22歳）に**メンター**を持つことは、教育達成度の向上、犯罪行為の減少、心理的幸福度の向上、成人期における恋愛関係の満足度の向上と関連する（Miranda-Chan.,et.al 2016）
・**家庭内暴力**の影響を受けた若者に対する**ユースワーク**の枠組みを使用したユースサービスは、**孤独感の軽減**や**共感の醸成**などに効果がある。（Coburn & Gormally　2014）

⇒ACEs等経験者は家庭環境により困難は増えるが、期待できるサポート源は少ない状況。
成人後も家庭環境に左右されずACEsの保護的要因を提供できるシステムを検討していく必要がある。

⇒**ユースワークが成人も含めた**ACEsの**保護的要因**
提供の場として機能する可能性があるのではないか？

研究目的

小児期逆境体験（ACEs）等の影響を緩和する関わりを、生まれ育ちに左右されることなく獲得可能な体制を明らかにすること。

方法：研究①

ACE s 等のある若者は家族からのサポートがないことで、どのような困難を抱えているのだろうか？

○目的
児童期に虐待などの社会的不利を経験したために**「家族を頼る」という選択肢を持たない若者**の抱える**困難の構造**を、その選択肢を失う過程やその後の困難に注目して明らかにすること

○調査協力者
「家族を頼る」という選択肢を持たないことにより困難を抱えたことがある18～39歳の若者・3名

○インタビュー調査実施期間・項目
2022年12月～2023年7　（１時間半／回）
① 成育歴、② 生活の中で困ったこと、
③ 家族について

○分析手法
戈木版GTA（戈木 2013）

表１．調査協力者の属性

ID	年齢	性別	最終学歴	現在の生活	定位家族（家庭内の支配者）	生殖家族（現在の暮らし）
A	20 代前半	女性	大学卒業	公務員	父，母，兄，妹，弟	独居
B	20 代前半	女性	高校卒業	アルバイト	父方祖父，父方祖母，父，母，弟，弟	未婚・子ども１人
C	20 代後半	男性	大学院在籍中	学生	母方祖父，母方祖母，父，母，妹	独居

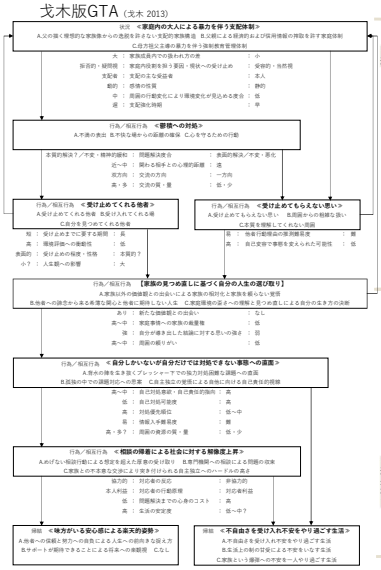

図１．【家族の見つめ直しに基づく自分の人生の選び取り】という現象に関するカテゴリー関連統合図

『家族を頼る』という選択肢を失うプロセス

○結果
「家族を頼る」という選択肢を持たない若者の【家族の見つめ直しに基づく自分の人生の選び取り】という現象が明らかになった。

○考察
＜困難の実態＞
① 支配的な家庭環境になる背景的要因
：**家庭内の不利の再生産**
② 「家族を頼る」という選択肢を失うプロセス
：見つめ直しと覚悟による「家族を頼る」という**選択肢の喪失**
③ 「家族を頼る」という選択肢を持たない生活の中で不安を募らせるプロセス
：**常に代替策の検討と対応**を求められることによる**心身への過大な負荷**

『家族を頼る』という選択肢を持たない生活の中で不安を募らせるプロセス

⇒「家族を頼る」という選択肢の喪失は積極的にも消極的にも生じていた。しかし、「家族を頼らない」ことを覚悟するという**積極的な喪失**を迎えた場合のみ、支配的な家庭環境から脱出し、**自己の人生を選び取る**という**Agencyの回復**に繋がっていた。

方法：研究②

そもそも、ユースワークはACEsの保護的要因として機能できるのだろうか？

○目的
ACE研究とユースワーク研究における**Agency概念の特徴**と相違点を整理し、両分野を接続する視点を提示すること

「責任をもって主体的に行動する能力」
（木村・一柳　2025：19）

○調査方法
・検索データベース　｜**Scopus、EBSCOhost、PubMed、ERIC**
・検索式　｜【ACE分野】（"adverse childhood experience"）AND（"agency" OR "agent"）
【YW分野】（"child abuse" OR "maltreatment" OR "neglect" OR "ACE" OR "adverse childhood experience" OR "emotional" OR "physical" OR "sexual" OR "trauma" OR "household dysfunction" ）AND（ "agency" OR "agent" ）AND（ "Youth Work" OR "Youth Center" ）
・検索日　｜2026年1月14日

※なお、②に関し、下記に記載する適格基準と除外基準に基づき精査した結果、対象となる文献量が非常に限られたため、vulnerableおよびdisadvantageのキーワードを追加して再検索を行った。検索日は、2026年3月13日である。

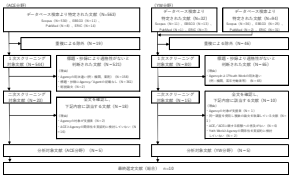

図２．文献選定のプロセス

○結果
ACE分野563編、YW分野32編が抽出され、
スクリーニングを経て、
最終的にACE分野5編、YW分野5編を分析対象とした。
※除外要因の多くは、Agencyを機関等の意味で用いる等、検索語の多義性に起因するもの

① ACE等の経験がAgencyにもたらす影響
・ACE分野　：Agencyの高さとの関連　1編、**低さ**との関連　4編　（重複あり）
・YW分野　：Agencyの**高さ**との関連　5編

② Agencyを高めるユースワーカーの介入
・個人への働きかけ（ミクロ）
：「**個人への教育・スキル獲得**」を支援すると共に「**対等な関係性**」と「**支持的な関わりによる信頼関係**」を構築
・ユースセンター（場）場への働きかけ（メゾ）
：円滑なグループ活動を支援するための「**集団運営**」と「**対話可能な安全な場**」を作るための支援
・ユースセンター外への働きかけ（マクロ）
：「**自集団以外への橋渡し**」をサポートが中心であり、若者のAgencyは「**ユースセンター外からの影響**」も受けていることは言及されているものの、社会構造への働きかけは限定的　（未投稿論文のため考察部分割愛）

⇒Agencyの操作的定義や判断基準の課題は残るものの、**ACEsにより抑圧されたAgency**が**ユースワークを通じて発揮できる状態**になる**可能性**が示された。

現時点で見えてきたこと

・支配的な家庭環境で成育したことで抑圧された若者のAgencyは、**ユースワークの利用により回復（＝発揮できる状態）する可能性**がある。
・ただし、ユースワークの関わりにおいて若者の**年齢に注目した研究は少ない**ことから、**成人**に対するユースワークの影響や可能性を探っていく必要がある。

○引用文献／参考文献
- De Bellis MD, Keshavan MS.(2003). Sex differences in brain maturation in maltreatment-related pediatric posttraumatic stress disorder. *Neurosci Biobehav Rev. Jan-Mar,27*(1-2),103-17.
- Coburn, A., & Gormally, S. (2014). They know what you are going through': A service response to young people who have experienced the impact of domestic abuse. *Journal of Youth Studies*, 17(5), 642–663.
- European Commission: Directorate-General for Education, Youth, Sport and Culture. (2012). *2012 EU youth report*. Publications Office.
- Felitti VJ, Anda RF, Nordenberg D, Williamson DF, Spitz AM, Edwards V, et al. Relationship of childhood abuse and household dysfunction to many of the leading causes of death in adults. The Adverse Childhood Experiences (ACE) Study. Am J Prev Med. 1998;14(4):245-58.
- Hays-Grudo, J., & Morris, A.S.（2022）『小児期の逆境的体験と保護的体験：子どもの脳・行動・発達に及ぼす影響とレジリエンス』（菅原ますみ・榊原洋一・舟橋敬一・相澤仁・加藤曜子、監訳）,明石書店、（＝Hays-Grudo, J., & Morris, A.S. (2020). *Adverse and protective childhood experiences: A developmental perspective*. Washington: American Psychological Association.）
- 平野真理（2015）『レジリエンスは身につけられるか一個人差に応じた心のサポートのために一』東京大学出版会.
- 一般社団法人Onara 2023 『すべての児童虐待被害者が切りすてられない社会の実現～具体的支援内容の検討及び要望に向けて～』社会的養護未経験児童虐待被害者の実態調査アンケート 統計データ分析結果 1
- McCord, J. (1983). A forty year perspective on effects of child abuse and neglect. *Child Abuse & Neglect, 7*(3), 265–270.
- Miranda-Chan, T., Fruiht, V., Dubon, V. and Wray-Lake, L. (2016). The Functions and Longitudinal Outcomes of Adolescents' Naturally Occurring Mentorships. *Am J Community Psychol*, 57: 47–59.
- 三谷はるよ（2023）『ACEサバイバー：子ども期の逆境に苦しむ人々』.
- 森田展彰（2019）『児童相談所の実態に関する調査：職員の配置および人材育成体制の実態、過告されたケースの実態および長期化した一時保護ケースの実態』
- 岡部茜（2019）『若者支援とソーシャルワーク－若者の依存と権利－』法律文化社.
- Sachs, G. S., Nierenberg, A. A., Calabrese, J. R., Marangell, L. B., Wisniewski, S. R., Gyulai, L., Friedman, E. S., Bowden, C. L., Fossey, M. D., Ostacher, M. J., Ketter, T. A., Patel, J., Hauser, P., Rapport, D., Martinez, J. M., Allen, M. H., Miklowitz, D. J., Otto, M. W., Dennehy, E. B., & Thase, M. E. (2007). Effectiveness of adjunctive antidepressant treatment for bipolar depression. *The New England journal of medicine, 356*(17), 1711–1722. https://doi.org/10.1056/NEJMoa064135
- 戈木クレイピル滋子（2013）『質的研究法ゼミナール：グラウンデッド・セオリー・アプローチを学ぶ（第２版）』,医学書院.
- 山田昌弘（2013）『なぜ日本は若者に冷酷なのか－そして下降移動社会が到来する－』,東洋経済新報社.